

きたい。」と案内を頼んだ。

是川遺跡から南へ約三百メートルほど走り、右手に折れ細い路を約百メートル進むと突き当りに清水寺本堂が見えた。

うっそうとした古杉の中に、肌寒くなるような静寂さ。境内に建てられた八戸市教育委員会の重要文化財の標示板には、昭和五十五年一月二十六日重要文化財指定、「清水寺観音堂・附棟札三枚」とある。

棟札は、「造営天正九年辛巳五月吉日の記があるもの一枚、再興慶長十八曆癸丑仲冬吉辰の記があるもの一枚、貞享三丙寅天潤三月拾五日の記があるもの一枚、」と書かれている。

〔註、天正九年（一五八一年）、慶長十八年（一六一三年）、貞享三年（一六八六年）、〕

標示板に記された文を次に掲げると、

『清水寺は、平安時代の天台宗の僧慈覚大師の草創の由来と言われているが定かでない。しかし、この観音堂が天正九年（一五八一）に建立された県内最古の木造建築であることや八戸藩成立以前の古文書を伝える市内でも古い寺のひとつであり、また、糠部三十三観音信仰第二番礼所として多くの信仰を集めてきた寺である。古くは天台宗であったが、明治時代になってから浄土真宗に改宗した。』

この観音堂の構造は、三間四方の方形造で茅葺芝棟の独特の屋根を持ち、軒は二軒繁垂木である。柱は全て丸柱で上部をしばめる粽という加工が施されている。各柱の上部は頭貫・台輪でつながれその上に平三斗を柱上だけでなく柱間にも並べる詰組の手法を用いている。また、正面三間の棧唐戸は龕座で取付けられている。これらの技法は、鎌倉時代に

じっくり時間をかけ、途中休み休みして見れたなあ、と思うほどに

資料も豊富で、県立郷土館に匹敵する博物館である。残念な事に、閉館時間一時間前に入ったので、時間を気にしながらひと回りしたが、機会があればもう一度足を運びたいと思ったのは私だけではないだろう。

館内のしおりからその一部を紹介すると、考古展示は、「先人の知恵」縄文時代の入江に面した「むら」の人びとの漁や狩の生活。「蝦夷の国」鉄製の道具が使用され、文字も普及していた奈良・平安時代の「むら」。

「土器の移り変わり」煮るための器、美しいまつり用の土器。歴史展示は、「根城をめぐる」南部家文書や出土品を中心に。「城下町八戸」は城下町八戸藩を中心に代表的著名人の紹介。「海に開く」近世の八戸藩の交易方法や様子を古文書中心で紹介。「寒風のもとで」飢饉に苦しんだ人々の様子。

民俗展示は、「海に生きる」浜の人びとの生活をカツコと呼ぶ手こぎの磯舟の实物を中心に展示。「田と畑」八戸地方で使われてきた農具。「祈りと芸能」八戸地方の豊作祈願の田植踊りとして発達した杖と、三社大祭を中心に紹介している。

無形資料展示は、八戸地方の人びとの心を「物」でなく「言葉」で表現したコーナー。この地方に古くからうたいがれてきた「民謡」、語り伝えられてきた「民話」、そして子供達の遊びと結びついた「わらべ唄」や、この地方の「方言」もわかりやすく解説している。

大急ぎで一巡し、時間ぎりぎり以外へ出たが、日はまだ高い。それでは、根城跡にも足を入れてみようという事になった。

いまは、つわものどもが夢のあと、の感じがする城跡は、無数の穴が掘られてあり、後で聞いたところによれば、発掘調査で建物の柱跡だと

中国から伝わった禪宗様と呼ばれる建築様式であり、内部もこの様式で作られている。この観音堂は、禪宗様の細部をもった正統的な中世式仏堂として東北地方北部の貴重な建築物である。

建立以来何度も繰返された修理のため改変された箇所もあったが、昭和五十七・八年の解体工事により創建当初の姿に復元された。また、消火栓設備なども設置され、保存管理に万全を期されている。

昭和五十九年十月

八戸市教育委員会

清水寺観音堂前で記念写真を撮り、一行は、沢田社長の車の後に続いてまた市中心街へと車を走らせた。

四、根城址と市立博物館

建武元年（一一、三三四年）陸奥国司北畠頭家の国代として糠部郡を中心に、北東北一帯を支配した南部師行が築いた城が根城である。

「根城址」は、昭和十六年国の史跡に指定されている。

八戸博物館はその一角に、敷地面積七、七二五㎡、建築面積二、〇七三㎡で、鉄筋コンクリート造りで建設されている。展示室は、「考古展示」「歴史展示」「民俗展示」「無形資料展示」に分れており、八戸地方の歴史の凝縮を見るが如くである。

充分に広くとった敷地に、延三、七六七㎡という床面積で、各展示室を覗いて歩くだけで疲れてしまう位の広さである。

いう事である。

『天正二〇年

（一五九二年）

の諸城破却書上

に「一、糠部郡

之内八戸 平地

破却 南部彦治

郎持分 唐ノ供

名代弥十郎」と

あり、この頃まで八戸城と称していたものとみられる。八戸家伝記（南部家文書）には

「当時国司祝云、是奥塞之根

柢也、以下称根城」とあり、

建武元年北畠頭家が根城と命

名したとあるが、後世の潤色

であろう。慶長三年（一五九

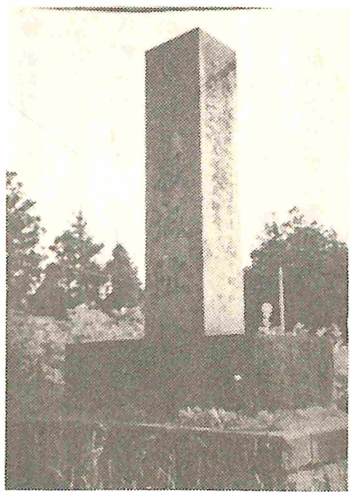
八年）の館持支配帳には「八

戸根城 老万三千石 紋範九

曜 八戸弥六郎」とあるが、

八戸弥六郎の襲名は延宝三年

（一六七五年）没の根城南部氏二代直義からであるので疑問が残る。元和四年（一六一八年）の知行目録に「根城廻」とみえるところから藩政初期に至り、根城と称されたものとみられる。



(根 城 跡)



城名については支城に対する本城の意とする説のほか、当城が破却された後根城南部氏が後の八戸城の地に新邸を築城して移住し、ここより旧城をもとの本拠の意として根城と命名したとする説がある。』と、根城について「青森県の地名(平凡社刊)」に載っている。

長草茫茫の本丸跡から去ろうとすると、右手南方の台地に数人の人たちが発掘作業をしていた。作業の邪魔にならないよう片隅に立ってしばらく眺めてから、リーダーらしき人に発掘の状況を聞いてみたら、根城跡が史跡公園となるため、年次計画で発掘調査をしているのだという。先ほど見た西側の穴は、約四メートル間隔の突固めで、礎石を置いて柱が建てられたものとみられている。建物が二棟建てられてあった跡だという。

新撰陸奥国誌には、根城村の館跡として、

『館跡 本村の戌亥の方にあり東に虎口あり北西は卑地にして土手高く北は田畑平夷なり東西七十七間南北七十五間土手高き所にて二丈陸幅弘き所にて八間今は菜園となり境界詳らす八戸左近某か居館なりと云ふ左近室は信直の女利直の妹なり子なし依て新井田小十郎か息男を養て嗣とす弥六郎と称す寛永の始遠野(陸中国閉伊郡)に遷りこの館廃す』

と記されている。

(註 根城南部氏は寛永四年(一六二七年) 現岩手県遠野市に転封になつている。)

楡引八幡宮からは川遺跡、清水寺観音堂、市立博物館と見て歩き、ここ根城跡を最後に第一日目の日程は終わった。

五、法光寺と三戸城跡

八戸での宿は、種差海岸県立自然公園の中の法師浜キャンプ場のある民宿である。宿のすぐ近くに高岩展望所がある。

夕食時には、われら一行だけの貸切りかと思われたが、朝食の時は、満員であったのがわかった。八戸名物のイチゴ煮も実(ウニ)をわれらが掬い上げてしまった感じである。

朝起きがけ高岩展望所に登ってみた。海に靄(もや)がちこめていた。展望所の周囲には、色々な植物が密生していた。今は珍しくなった「トジナ(熊柳)」のつるもみえる。

朝食が済んだ頃に沢田社長が道案内をすと言って迎えに来てくれた。八時半出発、前日通った是川遺跡近くを走り、国道340号線を横切り、農免道路入口まで送ってくれた。農免道路を真直行けば名川町へ出るといふ。大分近道を通ったらしい。沢田社長と別れ、福地村を経て名川町に入った。

私は昭和五十五年に一度観光サクランボ園や法光寺に来ているので、ガイドを勤める。

名久井岳は標高六一五・四m、県南では階上岳(七四〇・一m)に次ぐ高さの山で、その景観の良さから中腹にある法光寺とともに名久井岳県立自然公園に指定されている。

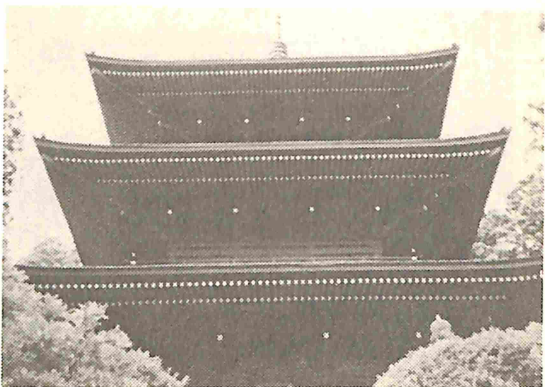
出合坂を登り、杉の老木の奥に黒門が見える。千本松・爺杉の下を通って坂を上って県立公園法光寺駐車場へ車を入れる。

白華山法光寺は、曹洞宗の名刹(めいさう)で、藩政期には寺領七〇石を有してい

たという。

広い境内には本堂、庫裏のほか山門・位牌堂・開山堂・鐘楼・三重塔・三大土堂・仏舎利塔などの諸堂が立ち並んでいる。

ここも前回来た時と違って本堂は新築されていた。前本堂は古びた由緒ある構えだったが、現在の本堂は規模は大きくなっていくが何んとなく観光的建物のような感じを受ける。県立公園として風光明媚な点はもとよりだが三重塔も又有名である。



(法光寺三重塔)

小庵に泊し欲待された。翌朝わが扇子に「老千石……永代可令知行也」時頼花押としたため、下山途中庵主玉峰指城に出合坂付近で別れた。翌年鎌倉からの上使により真言の寺は曹洞宗法光寺と改められ七堂伽藍経堂を創建したという。

法光寺を後に三戸へ向って車を走らせる。途中南部町の「南部利康霊屋」は時間の都合で素通りすることにし、三戸町城山公園へ直行す。

三戸城跡には、三戸城温故館(歴史資料館)が建てられ、昭和四十二年十月開館、四十六年四月には資料館が建設され、五十一年に三戸町立歴史民俗資料館が設置され、温故館および資料館はその付属施設と改められた。

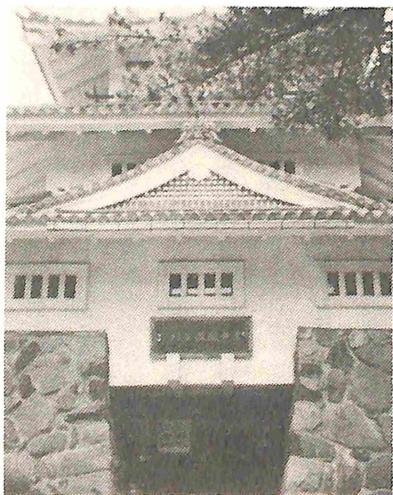
収蔵資料は、考古資料、歴史資料、民俗資料、人文科学資料、動物、植物資料、美術資料など約千七百点にのぼっている。

資料館の前には糠部神社がある。祭神は南部光行で、

三重塔は、昭和二十二年一月二十五日起工、昭和二十四年六月二十九日竣工したもので、総高さ約三十三米(百六尺)、幅約八米四方、延坪約三十九坪半(約一三〇㎡)、現存する三重塔の規模においては、日本一大きい。三重塔(承陽塔)は曹洞宗の開祖道元禅師の御霊骨を奉安供養するため建立されたもので、一階は道元禅師の御霊骨を祀り、二階・三階には前田道六作の五百羅漢五百四十一体を安置している。

法光寺は、建長年間の草創で、開基は北条時頼、開山は玉峰という。永正四年(一五〇七年)越後柏崎(現新潟県柏崎市)の香積寺五世通山が中興開山し、名久井城主藤原丹後守の菩提所となり、その後東三郎信政(三戸南部の重臣)の菩提所となったという。

北条時頼の廻国伝説は、弘長十二年(一一六二年)の冬のこの地を訪れた時頼は山麓にある真言の寺に一宿を乞うたが断られ、やむなく近くの



(三戸城温故館)

本殿は神明造り約一一・五

m、境内には秀吉の朱印状を刻した石碑、江戸時代の追分石がある。社殿は、明治二十四年焼失したが、同二十七年再建され、現在に至っているという。いま九十何年ぶりで修復工事中であった。

城山公園は三戸城跡の公園で、約三千本の桜があり、春は花見客でにぎわう。また園内にはグラウンド、町民プール、野球場、遊園地などの施設がある。

六、天台寺から鹿角へ

この日も暑く、城山公園の木陰でアイスクリームを舐めながら、次の日程の打ち合せをする。十一時を廻ったが、岩手県浄法寺町まで一気に走り、そこで昼食を摂る事にした。

三戸から金田一、福岡（二戸市）を経て鹿角街道を安比川沿うて南西に進む事約二時間、天台寺のある浄法寺町に着く。

私は、この町にミンクの飼育調査で四度来ている。

浄法寺町は漆の産地である。漆液の生産量は全国一で、国産漆の六割を産し、相場もこの町で決るといふ。

浄法寺漆器は、七百有余年



(天台寺)

前、八葉山天台寺の僧坊が伝習し、次第に隆盛したもので、町立歴史民俗資料館には漆器、漆かき用具、生活民具、土器、石器等が展示されている。

天台寺は、旧鹿角街道から南へ、安比川を渡って山道を登ってゆく。歴史民俗資料館の手前の駐車場に車を止め、境内入口にある桂の太木とその下に冷い清水が湧いている、「桂泉観音」が本尊だとされる。が、本尊は「聖観音」ではなく、「十一面観音」（いずれも国の重要文化財指定）だという説と、「比叡山に見られるように、鎮護国家の寺院の本尊は「薬師如来像」が建前だ」という説がある。

桂清水の前に建てられた案内板によって開山、変遷を次に記す。

《開山》 継体天皇のころ、桂泉大明神として、月夜見の尊を祀ってあったことが、だんぶり長者物語にみられる。その後、年月を経て第四十五代聖武天皇の勅願によって、神亀五年（七二八年）に行基大僧正が、自作の一刀三礼鉞彫の霊像聖観音立像を本尊として安置し、八葉山天台寺と命名開山した。（以上寺伝による）爾来、一千二百有余年別当が世襲して大正年代まで桂寺院として六十代続いた。

別当桂寺院を補佐する坊として別院月山神社別当四方院（三光院）を始め、実蔵坊、池本坊、中坊、法蔵坊、徳蔵坊、代仙坊等の協力のもとに経営。八宗兼学の天台教学根本道場として天下の信仰をあつめてきた東北随一の古刹である。

現在の国分寺及び尼寺は、東大寺、法華寺（尼）を残すのみであるが、奥東北の地に命長らえた天台寺は驚異に値するものと言われている。

《変遷》

寺伝によれば、天平九年（七三七年）聖武天皇が諸国に国分寺を建立されたが、その時、勅があつて直ちに天台寺を国分寺として指定されたと言われている。

大同二年（八〇七年）平城天皇の時、坂上田村麻呂將軍が天台寺並びに末社四十八社を再建、さらに寛平五年（八九三年）宇多天皇の勅によって延暦寺二世慈覚大師がはるばる来山して本堂を再建、元中八年（一三九一年）には南部十三代守行公によって、さらにまた永享五年（一四三二年）南部第十四代義政公が足利義教の名代として参山再建、明暦三年（一六五八年）南部二十八代重直公の再建を経て現在に至る。

なお、明治維新の際の廃佛棄釈の禍は天台寺にも及び当時本堂はじめ二十七あまりあった山内の堂宇及び二百体近くあった佛像の大半が破壊焼却された事件は、廃佛棄釈で有名なのは奈良興福寺の五重塔売却事件であり、最大の被害をうけたのは、天台寺である（大日本佛教史）といわれたほどである。

新撰陸奥国誌には、

御山村

福岡の西南の方に当り行程四里二十五丁家数十八軒山間卑地に住す東四小区出ル町村界まで五丁其村までは二十八丁北漆沢村まで十四丁長流部村までは二十丁南吉田村まで二十八丁戊亥の方松岡村まで十五丁

神社

月山神社 境内二十五坪 本村の東五丁高き所にあり

祭神 月読命

本社 一丈に一丈一尺南向
拜殿 二間に三間ヒハタ葺

寺院

何の頃の草創にか詳ならず永享中南部大膳大夫義政社地を寄し後炎上して子細伝らず或は中葉観音堂に配偶し今の二王門を隨身門とも唱ふるは其名残なりと云ふ後又別に此の所に祠を営み専ら神祭せしなりと云り（地藏寺由来記を按に初桂清水に月読命を祀しを聖武天皇勅を以て観世音を安置せし時読神をは今の地に遷座し奥の院となせしと云しか年月の久し轉換して末社となりたる月るへしと云へり）

天台寺

境内六千二百二十坪、本村の中高き所にあり八葉山と号し桂寿院と称す縁起を按に行基の開山にして神亀五年戊辰四月の草創なり何の頃にか廃頽し明徳九年壬申三月土佐阿闍梨導尊が中興し此間の来歴詳ならず導尊より三十五代親覚か時明治中法輪院派の修験を改て近江国延暦寺の末山となる当時は当区は古刹にして観音堂の別当職となり旧は四十二石八升荒谷小鳥谷両村の内知し同三年八月神仏仕分の命ありてより観音堂の境内に祭りし攝社水波能売命を桂泉神社と改め復飾して桂恭司と改め神職奉仕を上達し仏を除き専ら神祭に改たりしか同十二月由来ある古観なるに廃棄せずとも然るべきの教示を受け再び観音に復し別当には恭司か親恭秀別当となり桂樹院か遺跡並に観音堂旧に復し恭司

は帰農し水波能売命は廃棄せり依て自ら神官は免せられたりこの時まで外に五衆徒あり実蔵坊(旧桂寿院の北にあり)池本坊(上の如く)中之坊(上の如く)宝蔵坊(上の如く)徳蔵坊(上の如く)と云て共に山下に住せしか神仏仕分の際に帰農せり桂寿院は旧に復し山上の籠堂を庫裡とし(旧の桂寿院は恭司か居所とす)観音堂の傍に移て別当せり俚人の口碑に元文四年の秋南部利勝巡回の節中之坊か二子の詠哥に

明治維新政府は明治元年に、神道と仏教を分ける政策(神仏分離令)を布告した。神仏混交は弊害あるとして、それぞれ別個に宗教活動をさせようとしたものを、神道者と地方官吏が「仏法を廃し、釈迦の教えを棄却する」廃仏毀釈にまで拡大解釈して、仏教そのものを排除するため、寺院、仏像、仏具、経文などへ破壊の手を伸ばした。

明治三年十二月、社寺調査制布告とともに天台寺は運命のときを迎えた。この地方の管轄権を岩手県から得た青森県官吏(江刺県という説もある)は同時に実地調査と称して乗り込んだ。山内二十ヘクタールに末社二十七社が散在して天台寺の威容を誇っていたのに、官吏はこれを見無視して天台寺の境内を本堂の周囲約一ヘクタールと決めた。一方、同等の四鎮守のひとつ、月山堂を切り離して村社・月山神社とし、約三ヘクタールの境内を与えた。他の末社はことごとく廃止した。さらに残った山林も一等官有林として召し上げた。

浄法寺町漆沢の漆田市郎さんは祖父から当時の模様を聞いている。

何回か見学している人もいるので、希望者だけが入坑、各地で予定時間を少しづつオーバーしているの、一時間以内という時間制限をした。鹿角は温泉と観光の街であり、歴史の街でもある。国指定重要無形民俗文化財「大日堂舞楽」「だんぶり長者」の物語り、「錦木塚」の悲恋物語りなど、花輪ばやしや大湯大太鼓も観光として有名である。

私たちは最後の目的地である特別史跡「大湯環状列石」のある台地に下車した。

大湯環状列石(大湯ストーンサークル)は、昭和七年鹿角市十和田大湯の海拔一七〇メートルの台地に発見された。

昭和二十六年、国の発掘調査によってほぼその全容が明らかにされた。しかし、未だその跡が何の目的に使用されたものか、墳墓説、祭祀説、或いは農耕に関連した天文学的意義をみる説などの諸説はあるがまだ定かでない。史跡は約四千年前の縄文後期のもので、六キロ程離れた小川に産する河原石で築造されているのだという。

まだまだ見たい所もあったが、二日間の日程で充分過ぎる程の見学場所を廻り、疲労も溜ったし、村へ帰るまで約三時間の行程である。非常に強行軍であったが、幸いに事故もなく、落伍者もなく無事帰る事ができた。

最後に、マイクロバスの運転してくれた原田万治会員と八戸市内を案内してくれた沢田八戸プリント社長に感謝の意を表し、雑な報告であるが、嘉瀬ふるさとを探索会の会員研修の記を終る。

参考文献 II 新撰陸奥国誌、青森県百科事典、青森県の地名、ほかに各地の観光パンフレット

「浄法寺町長流部に住む見るからに力持の大男が来た。官吏風の男も一緒だった。仁王の手首や足にマサカリを振ってバラバラにした。焼かれた仏像も随分あった。壇家たちはヤミの中で小さな聖観音(国重要文化財)十一面観音(同)などを福蔵寺(浄法寺町)に移して守った。しかし大型の薬師如来座像などは運べず山林に隠した。土中に埋めたのもあった。破壊旋風がおさまってから掘り出そうとしたが、場所が不明になり、再発掘が遅れ台無しになったのも多かった。」と伝える。「天台寺そのナゾに挑む」より

頂上から汗を拭きながら下りて来た五人と、下で待っていた二人がマイクロバスに乗り込んで次の目的地鹿角市へ向う。安代町から津軽街道に入り、湯瀬を過ぎ、花輪に入る。花輪線の踏切りを越え米代川を渡って尾去沢へ。

マイランド尾去沢は、尾去沢鉱山跡を再開発し、昭和五十七年四月観光鉱山としてオープンしたものである。尾去沢鉱山の歴史は古く、和銅元年(七〇八年)に発見されたと伝えられている。天平感宝年間(七四九年)には金山が発見され、奈良東大寺の大仏造営や、藤原三代の繁栄に貢献したと伝えられている。南部藩の経営を経て明治、大正、昭和は三菱鉱業、三菱金属鉱業と経営は変わり、昭和四十七年四月尾去沢鉱山で再出発したが、銅価の低迷と鉱量の枯渇により昭和五十三年五月末、千二百年にわたる鉱山の歴史を閉じた。

坑内博物館は、マグシーバー(携帯用説明機)による説明で、全坑道七〇〇キロメートルの内、観光坑道は約一、一〇〇メートル、見学所要時間は約一時間である。

鳴海勲さんの

りんご畑から土器

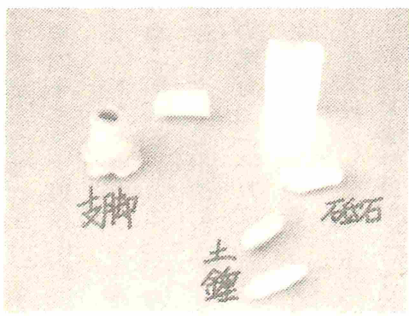
木村 治 利

嘉瀬八幡宮境内の近く、鳴海勲さんのりんご畑で、溝を掘っているうち土器片が出土しました。鳴海さんは、なお掘って行くと、住居跡らしく、カマドの跡もありましたので、調査をお願い致したく町教委に報告しました。

しかし、町教委からは遺跡発掘は違法であり、直ちに発掘を取り止め、元通りに埋め、出土品はそのまま土中に埋めておくようにとの指示でした。土器は、支脚、土鐘、砥石で平安時代末期のものでした。文化財は、現人ばかりのものではなく、何時の時代の人でも発掘して見られるような保存方法でなければならぬ。

八幡宮は、嘉瀬西館跡地で天正十五年五月(一五八七)金木館守津島金右エ門の裏切りにより急襲され、高橋城幕下の西館守三浦権十郎重孝、砦に放炎討死し果てた。今から四〇〇年前のことである。

西館は、平泉藤原時代の蝦夷館跡と伝えられるが、八幡宮境内周囲の空堀の脇に咲く、トリカブトの藍色だけが、出土品の謎を語りたげに秋風に揺れていた。



出土品